

氏 名	清 水 敏 弘 し みず とし ひろ
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 427 号
学位授与の日付	昭 和 43 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	人顎骨における赤色髄の分布ならびにその増齡的推移に就いて

論文調査委員 (主 査)
教 授 堀井 五十雄 教 授 西村 秀雄 教 授 岡本 道雄

論 文 内 容 の 要 旨

著者は新生児より40歳に至る21屍体より得た上、下顎骨を研究材料に乳幼児、少年、青年および壮年の各期における顎骨骨髓の性状について検索を進め、赤色髄の分布状況ならびに骨髓の脂肪化現象について追求し、顎骨骨髓の増齡的変化を組織学的に研究して次の結果を得た。

- 1) 新生児の顎骨骨髓腔は赤色髄をもって占められているが歯胚を包む周壁の骨髓は線維性骨髓像を呈している。
- 2) 幼児期の顎骨骨髓は主として赤色髄であるが歯槽部より脂肪化が開始されて拡散し、漸次不完全赤色髄に移行し、一部では中間髄像を呈している。
すなわち顎骨骨髓の脂肪化現象は比較的早期より開始されるものである。
- 3) しかし乳歯歯胚を容れる骨包の周壁および乳歯の歯槽部は線維性骨髓像を呈している。
- 4) 少年期に至れば顎骨骨髓の脂肪化はさらに進行し、赤色髄の分布は著しく減少する。
- 5) 顎骨骨髓の脂肪化は正中部の歯槽突起より開始され、漸次骨体の深部に波及するとともに、遠心性に顎骨の後方部へと進展する。
- 6) この場合、脂肪化は顎骨の内、外板を構成する緻密骨質層に沿って波及する傾向がみられ、また臼歯部においては下顎管の周辺部に脂肪化現象が著明である。
- 7) 青年期に至れば顎骨骨髓の脂肪化は著しく進展し、骨髓の大部分は黄色髄像を呈しているが、その反面著しく赤色髄の残留するものがみられ、顎骨骨髓の脂肪化は著明な個体差のあることが推測される。
- 8) 壮年期に達すると顎骨骨髓の大部分は完全な脂肪髄像を呈し、次いで増齡的に歯槽部より膠様髄に変化する。

しかしながら第2および第3大臼歯の後方の髓骨深部には晩期まで赤色髄の残留する場合が多い。

論文審査の結果の要旨

ヒトおよび動物の骨髓性状，その年齢的推移については一般には多くの研究があるが，顎骨とくに下顎骨は骨髓内に下顎管の通過すること，歯牙の骨包および歯根の歯槽として歯牙の発生，発育，萌出に伴う咬合機能参加など諸多複雑な因子を有するために，一般骨と異なり，ことに口腔解剖学的見地から歯牙の発育と関連づけて解明すべき諸多の問題を含んでいる。著者はこれにかんがみ，新生児から40歳に至る21屍体の上，下顎骨を研究材料としてその骨髓性状を調べた結果大略つぎのような結果を得た。

1) 新生児の骨髓はもとより大部分が赤色髄であるが，歯胚周壁の骨髓は線維性骨髓像を呈している。しかし顎骨骨髓の脂肪化は比較的早期から開始され，歯槽正中部突起部から始まり，漸次骨体深部および遠心性に後方に波及する。ただし歯胚を容れる骨包周壁は線維性性状を呈している。

2) 少年期から青年期に移行するにつれて骨髓脂肪化は漸次進展の傾向を示すが，その際顎骨内，外板の緻密骨質層に沿って進展する傾向を示し，臼歯部においては下顎管の周囲部に脂肪化が顕著に起こる。

3) 壮年期に至れば顎骨骨髓の大部分は完全な脂肪髄と化し，漸次増齡的に歯槽部から膠様髄に変化する。ただし第2および第3大臼歯後方の顎骨深部には晩期まで赤色髄の残留する傾向がつよい。

以上本研究は上，下顎骨骨髓の変化を顎骨の部位別，とくに歯牙の発達と関連づけて，その推移を年齢的に検索したもので，とくに口腔解剖学上の意義が多い。

本論文は学術上有益であり，医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。